

情緒的統合性と自我障害の関係

ロールシャッハ・テストと意味微分法 (SD 法) による分析

高木豊志子

I 問題

1 ロールシャッハ反応過程

投影とは、広義に過去の経験や知覚が現在の刺激に影響を与えることである。投影のメカニズムに於ては、感情や情緒は、その記憶の事実が付帯して誘発される。ロールシャッハ・テスト（以下、ロ・テストと記載する）は TAT 等と同様、その刺激属性の多義性、あいまい性を有した図版特性に対する認知過程の特徴から投影のメカニズムが検討される¹⁾。

刺激認知に於ける統覚や歪曲は、刺激特性とそれを認知する人格的な偏り（自我障害の程度）の相互作用によって異なる。統覚とは、過去の経験・学習を基にした意識的生活経験がスクリーンになってその上で無意識的な動機づけが投影される。いわば生活体に於ける知覚の意味的解釈であり、非個人的、非解釈的知覚とは区別されねばならない。統覚的知覚では、多くの場合、何を見たかという点が問題となるのではなく、むしろ何故その様に見えたかという知覚の動因が問題となる。

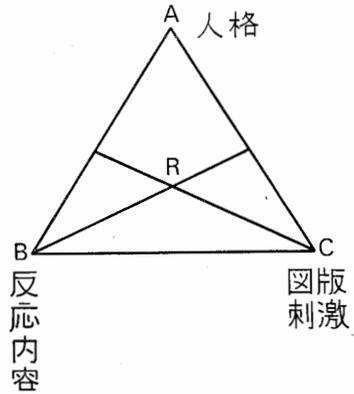
ロ・テスト反応の知覚過程は、1) image, idea を自由に想起する段階 (primary process)。2) image, idea を図版に適合させる段階 (secondary process)。3) 更に適合させた image, idea を言語化して伝達する段階、といった三段階を経る。1) では、生活体の先行経験の記憶痕跡に依存する純粹に空想的・表象的過程であり、生活体の衝動・欲求にもとづく primary process (一次過程) が支配的である。1) から 2) の段階では、外界の刺激条件に依存する要因が作用し、1) に於ける個人的な表象内容は、インクプロットという外界の枠組に規制され、プロットに適合する様に修正され image, idea は一定の方向性や価値体系をもつ様組織化される。自我の secondary process (二次過程) が支配的となる。2) から 3) に到る過程は、2) での表象内容、観念が更に選択され個人的な解釈が公共性をもつ言語 (シンボル) で表象され反応として伝達される。従ってここで最終的に反応として伝達された内容は、人格の一次過程をふまえた二次過程によって取捨選択された統覚的内容と考えて差しつかえなからう。

我々は、ロ反応を(1)プロットの刺激属性と反応内容との関係、(2)に人格の心的機能（特に情緒

1) 本明寛 ロールシャッハ・テスト人格診断法 金子書房 昭和37年

的機能と現実吟味の機能)と刺激属性との関係、(3)に、人格の心的機能と反応内容との関係といった三方向から分析し理解することが、人格診断上きわめて有効な示唆を与えうるものと考えてる。

従って反応形成過程を下图に示したトムキンス²⁾の三角形を借りて説明するならば、まずAは人格、Bは反応内容、Cは図版刺激属性となる。A-B、B-C、C-A はそれぞれ対応関係を有し、A-B-C の三者の力動的相互作用の結果、反応Rが生ずる。



(1)反応内容と図版刺激の関係は、B-C 線上で捉えられる。中点を一応の基準とし中点よりCに接近するにつれ反応内容は、統覚の水準から知覚的水準へ移行する。極端な場合は、意味ある反応ではなく、単なる絵の記述となる。

(例、これはインクのシミです。絵具をおとしてできた絵です。)これに対してB極への接近は、統覚作用が歪曲を受け、図版刺激がややもすれば無視され、反応内容の概念

を blot に適合させる為の、省略、追加、歪曲が生ずる。一般正常者は、これらの中間的位置を占める。つまり image を blot の刺激属性に適合させる統覚過程での段階で反応がなされることを意味する。B・C いずれの極に偏向しても、診断上重要な手がかりとなる。

(2) A-C 線上では、刺激属性に対する人格の感性受容の柔軟性が測定される。即ち、ロ・テスト刺激は、一種の情緒的ストレス状況に類似しているから、情緒刺激に対する人格の感情の深さ浅さ、及び感性受容の広さ狭さと感情の貧困さ豊かさが自我の情緒的統制機能の柔軟性の程度に応じて表出される。A極では、主観的個人的な意見の表現様式をとり、情緒的刺激受容の極度に拒否的、あるいは受容的な表現様式をとる。(例、「これは分かりません」「何を意味してるの分かりません」)中点附近では、図版に対する感情移入的表現(例、「面白いです」「つまらないです」)が生じ、この段階では、刺激を課題解決の問題として取り上げつつ自己の感情の主観の様相をも強く表現した感情移入的反応が生ずる。更にC極では、全く刺激そのものに関して(例示：これはまずい絵です。コモリにしてはここがおかしいです。)といった刺激属性に対する批評となり、自己の感情を介入させない知的、批判的態度が主となる。

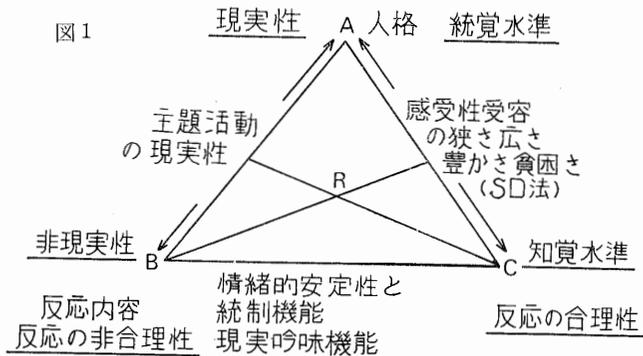
我々は、一次過程に於ける種々の表象内容に伴う情緒が、二次過程でいかに統合されて反応内容に於ける概念形式の中に組み込まれたか、自我の情緒的機能の統合性と柔軟性をBからA-Cにおろした直線との関係で観察することができる。A-C 線上に於ても(1)と同様一般正常者の反応は、ほぼ中点附近に存する。

(3) A-B 線上は、人格と反応内容との関係を示している。ここでは、主題活動の現実性：自由性と、自我機能の柔軟性の相互の力動関係が捉えられる。反応内容は、人格の過去の累積され

²⁾ Tomkins, S. S. *The Thematic Apperception Test*. New York, Grune & Stratton 1947.

た経験から、自我の集約力によって取捨選択され blot に適する反応として表現される。従って内容の主題活動は、現実的な内容から抽象的、非現実的内容に到るまで、時間的な連続系の中を自由に変動する。それに伴って内容の快・不快の情緒的要因も自由に変動する。Aの極では、人格の個人的要因に支配され、私的世界が、生々しい現実の水準で語られるが、主題活動の自由な創造的所産とはならず非生産的な体験談の域をでない。逆に、個人の経験から離れて非現実的空想性を帯びた内容が出現するのは、B極である。A-B の中間に主題活動の自由な現実的反応内容が位置づけられる。心的機能の柔軟性や防衛機制が障害を蒙っていない正常者の反応がこの中点附近に位置づけられる。A, B の両極では、自我の心的水準の低下による現実性の喪失、ないしは抑制、抑圧による自我防衛の硬さ、もろさが考えられる。A-B 上では、反応内容が現実性を帯び且つ自由に主題活動が行使されているか、反応内容と人格との心理的距離をみるのである。と同時に、この反応が blot の刺激属性に合致しているか否か、反応の合理性の有無は、C から AB 上におろした直線によって決定される。

我々は、この三角形のシエマから、最も望ましい反応のヒナ型が図で示した A-B の中点と C を結ぶ直線との中点とを結ぶ直線の交点 R となる。即ち情緒的にも統合され、認知的にも blot の統覚を歪曲せず、現実性を帯びた創造的反応内容である。上述したシエマを R 反応と対応づけて簡単に示すと図 1 の様になる。



2 情緒的統合性

R・テストは、人格の現象的、行動的側面を捉えるよりも、機能する自我組織を反映していることを述べた。自我心理学をロールシャッフ法に導入した Klopfer, B³⁾の見解に従えば、自我の情緒的機能を次の様に大別している。即ち、自我同調的情緒状態 (ego syntonic affect)、自我隔絶的情緒状態 (ego alien affect)、と自我から分離された情緒状態 (ego dissociated affect) の三種である。

自我同調的情緒状態とは、情緒刺激に対して (R法では特に濃淡、色彩刺激)、現実吟味力を損わずにしかも主観的には快の感情体験でもって、自己の感情と観念を結合させる場合である。この過程でなされる反応は、無意識からの衝動を外的行動にうまく調節する為の内的資質(M)を十分備えていることを示す。形態水準の低い反応 ($0 < F.L. < 1.0$) は、空想と現実との結合力の弱

3) Klopfer, B., Ainsworth, M. D., Klopfer, W. G., and Holt, R. R. *Developments in the Rorschach technique* Vol, I, II. World Book Co., 1954.

さを示している。観念と情緒の調和のとれた人格は、自己の価値体系 ($M=FM$, $M>FM+m$) と衝動体系との不一致が少なく、衝動に対して社会化された統制力を有することを示している。

自我隔絶の情緒状態の反応過程とは、情緒刺激に対し、非情緒的刺激よりも現実吟味力の低下をきたし主観的には不快の感情でもって反応する場合である。これは、自我の対外的、あるいは対内的情緒統制機能と基本的な情緒の安定性に何らかの障害が生じ、自我の非合理的な防衛機制が働いた結果である。□反応では色彩、濃淡の主観的障害で把握されるが、色彩や濃淡の不快さを伴った主観的障害 (color dynamics 及び F/C , C/F , $F \leftrightarrow C$ Csym., etc, Shading dynamics, F_c , cF) は、情緒刺激を伴う場面での障害を意識的に認知していることを示す。

愛情欲求を認知することに抵抗がある場合には、濃淡反応を犠牲にして形態反応が増加する。あるいは、情緒刺激への外面的行動を抑制する場合には色彩反応を犠牲にして形態反応が増加する。更に、自己の衝動生活を抑制して衝動から生ずる表象内容を収縮させる場合がある。これらの場合、いずれも自我の現実吟味力が低下 ($F.L \geq 1.0$) しない限りでは、非個人的な行動様式で環境と接触してゆける適応力をもっていると考えられるが、自我の対外的、対内的情緒統制機能が柔軟性を欠き、自我が内的衝動を外界の要請に調和させることができない場合には、自らの反応を能動的に制限する神経症的収縮が顕著となる。

第三に、自我から分離した情緒とは、情緒的刺激に対する感受性を完全に欠いている場合か、あるいは、情緒刺激に対して不気味な不快な内容を与えながら、情緒的に全く無関心な状態、つまり観念とそれに伴う情緒との間に何の関連性も結合もなく両者は全く別々に遊離してしまう場合である。□反応では、主観的障害の中でも最も重篤な濃淡や色彩に対する感受性の欠如を示し、限界検査に於ても色彩や濃淡の存在を指摘しえない場合である。特に濃淡への感受性欠如は、幼児期に激しい愛情剥奪の経験があって安定した依存関係や愛情関係への欲求が満たされて発展することなく、強い抑圧の機制によって無意識の内に抑えられてきたことを示す。客観的障害が、色彩否定、色彩回避反応等による色彩障害と共に認められる場合には、自我は自己の困難を意識的に認め逃避の方法によってでも情緒刺激の処理を試みているが成功せず、自我防衛の失敗を暗示している。客観的障害が現象的に、主観的障害を伴わずに生ずる場合には、情緒刺激のもとで精神機能が崩壊し、しかも自らの困難に対する洞察がなく、従って現実との接触がひどく弱化していることを示す。

我々は、上述した三種の情緒状態から以下の様な結論に達する。

まず第一に、自我同調的情緒が、十全に機能する人格に於ては、自我の防衛機制は適応的 level で活用され、外界からの情緒刺激に対しては、一時的に一次過程へ退行した状態で刺激状況を快的なものとして楽しみ、自己の空想的産物を自我の強い集約力と共に、合理的現実的な二次過程の level に還元した創造的所産を与えることができる。自我の対内的、対外的情緒統制力は平衡

を保ち、基本的な情緒の安定性にもとづいた個性的な反応様式を保つことができる。自己の観念と情緒とは十分に統合されている。

第二に、自我隔絶的情緒が機能する人格では、自我の情緒と観念との間に、自我に統合されない何らかの不安感、緊張感、意識的な葛藤の存在が認められる。従って自我の防衛機制は、Klopper のいう神経症的収縮の形態をとるか、抑圧や逃避的手段をとるか、いずれにせよ自我の不安定な防衛の為に、情緒と観念との緊密な連合に障害が生じ、観念と情緒との十分な統合性を欠く。

第三の自我から分離した情緒が機能する人格とは、現実と情緒的に生きた接触を喪失した人格である。これは、情緒障害、自我障害の最も重篤な型で、感情的反応の著しい浅さと心的機能水準の低下が特徴的であり観念と情緒との結合が無い。

我々はこれら三者を心的機能の連続的体系上に位置づけるならば、第一と第二の中間に、葛藤がありつつも、適切な現実吟味でもって情緒的統合を目指そうとする統合への努力の段階を仮定する。又、第二から第三の中間に、現象的には主観的障害が減少し、客観的障害が生じて現実吟味力の低下をみるが、完全には精神機能が崩壊しない心的水準域を仮定する。

この様に情緒的機能の統合性を問題とする場合、濃淡や色彩反応の分化の程度、主観的障害や客観的障害の出現の仕方とその程度、人格の内的資質や共感性の問題等、詳細な分析が必要であるが、我々は、情緒的統合性と自我障害の関係を口反応と意味微分法（SD 法）から検討する。

II 目的及び仮定

本研究の目的は、人格の情緒的機能の統合性、安定性を、口、テスト反応と SD 法の対応関係から把握することを目的とする。

我々は、感受性受容の意識的側面を測定する尺度として SD 法を採用した。つまり同一図版に対する SD 評定と口、テスト反応の反応過程は、人格に対して図版のもつ視覚刺激のもつ意味とその刺激に対する反応との間に介在する表象過程に帰因し、しかもその表象過程は、人格の情緒的統合にもとづく自我の現実吟味の機能に規定されると考えられる。従って同一刺激に対しても、それを受けとめる人格の成熟、成長の程度、自我機能の健全性の度合いに応じて異なった反応過程をとるであろう。

即ち、1) 情緒が自我によく統合されている場合には、SD 評定と口反応との対応関係に一致した傾向が認められるだろう。

2) 情緒が自我に十分統合されていず、葛藤がある場合には、SD 評定と口反応との対応関係に不一致な傾向が認められるだろう。

3) 自我に情緒が統合された後、何らかの原因で自我障害を生じ、情緒的統合が、毀損された場合、SD 評定と口反応との対応関係は不一致の程度を増大させるか、各々独立した関係を保つだろう。

4) 逆に、図版刺激特性からみれば、自我障害の程度に従って10枚のカード相互の特性を把握

ることができよう。

III 方 法

1 指 標 の 設 定

1) 感受性の豊かさ、活発さ及び感情移入の自由さの指標：SD 法による20項目の中の13項目。Osgood の分析方法に基づきロールシャッフ図版に対する感情的評価を測定した結果（分析，手続き，方法は別の論文で紹介する）第一次元：色彩，形態に対する論理的評価の次元（5項目），第二次元：純粹に情緒的な要因（9項目）と色彩・形態に対する感性的評価（4項目）の次元（13項目）第三次元：ダイナミズムの次元（5項目）の三次元に関する13項目を指標として設定した。（後に示す）

2) 主題活動の自由性と主題の現実性の指標：Klopfer, Holt の反応内容から，I, II, III, IV, V, VI, VII, 図の反応は全体反応(W)に限定した。図 III, VIII は，そのゲンタルト特性からW反応W反応に限定。IX, X の図は例外で反応領域として部分反応領域として部分反応，平凡反応の有無を考慮した。反応内容は，現実的 level で快的な内容・不快な内容・中立的内容と非現実的 level で快的な内容，不快な内容・中立的内容の6カテゴリーに分類された。各カテゴリーに関する基準は，Holt の分類基準（L1, L2, の Anx. Ag. Sex）と Klopfer の RPRS 反応内容カテゴリー（A, H, (A), (H), Abrt, Art, At. Sex. obj., etc）を参考にした。

3) 現実吟味力の指標：F+%及び形態水準評定。

4) 対外的情緒機能の指標：色彩反応に対する主観的ないしは客観的障害を示す16項目と M, FM. m 反応，Fc, cF 反応である。16項目とは，① F/C, ② C/F, ③ Csym, ④ F↔C, ⑤ Cn, ⑥ Cdes, ⑦ color choosiness, ⑧ shyness, ⑨ denial, ⑩ avoidance, ⑪ disregard for color, ⑫ FC-, ⑬ CF-, ⑭ 反応時間の遅れ, ⑮ 感想, ⑯ 取消しと拒否である。

5) 対内的情緒統制機能の柔軟性の指標：濃淡反応に対する主観的ないしは客観的障害を示す8項目と Fc, cF 反応，M. FM. m 反応である。8項目とは，① shading denial, ② evasion, ③ insensitivity, ④ Fc-, ⑤ cF- と ⑥ 反応時間の遅れ, ⑦ 感想, ⑧ 取消しや拒否である。

これらを前述した三角形のシェマのダイナミズムの観点から，以下の様な整理基準を便宜的に設定した。

2 基準及び整理法

1) SD スケール13項目については図版別に一貫して7段階評定中3以下に評定した場合：肯定的評価の一致（PC），5以上に一貫して評定した場合：否定的評価の一致（NC），4の中間評価が13項目中85%を占めた場合：中立的评价（M），一貫した評定の一致がなく中間評価が15%以下を占める場合：不一致（UC）とする。

4) Holt, R. R. and, Havel, J. A method for assessing primary and secondary process in the Rorschach. (*In Rorschach psychology* pp. 263-315).

2) 反応内容は、指標に従って6カテゴリーに分類。

3) 主観的障害、客観的障害も同様。

4) SD法とロ反応の対応関係を分析する為に、SD評定(PC, UC, NC, M)(4通り)を基準として反応内容(6通り)と色彩濃淡の操作の方法(5通り)を組み合わせると120通りの組合せができる。その中で理論的に合致しない組合せを省き、前述した自我同調的情緒から自我から分離した情緒機能の五段階に該当する組合せ項目に、1~5のweightを与えた。1は自我同調的情緒(7通り)、2は統合への努力段階(9通り)、3は葛藤状態(自我隔絶)(12通り)、4は自我分離への移行(20通り)の段階で不適応的防衛、5は自我から分離した情緒状態(29通り)である。

3 手 続 き

1 対象：正常者(N)20名(女3名)神経症群(P)14名(女7名)分裂病群(S)18名(女9名)を自我障害の異なる三群として選んだ。平均年齢は、N, P, Sそれぞれ23.5歳, 22.2歳, 26.4歳で知能はIQ 110~130の範囲。学歴は2名を除き高卒, 短大, 大卒である。症状は、P群は森田氏神経症と診断された入院患者(入院歴3ヶ月以内)S群は、妄想型分裂病, 破瓜型分裂病が大半で離人症, 境界線の者2名。いずれも精神科医により分裂病圏と診断された者ばかりである。

2 ロールシャット・テスト

個別法, Klopfer法にもとづく。

3 SD評定。

ロールシャット・テスト終了後、図版I~Xに応じて1枚ずつ評定させる。

III 結果と考察

分析1：各図版に対する感性受容の自由性の分析結果は、表1, 表2, 及び表3, 表4に示される。表1, 2は、情緒的項目の評定一貫性を検定によって三群を比較した結果である。表3, 4は、13項目を含めた全スケール20項目間の評定傾向を比較した結果である。

表1より三群間で統計的に有意差を生じた図版は、VI, VII, IX図である。N群とP, S両群で有意差の生じた図版は、VII図である。ここではN群がP, S両群に比べはるかに肯定的評価の一致傾向が強い。N, S群は、逆に、不一致傾向が強い。VII図のもつ柔かい濃淡刺激からくる女性的imageに対する感情移入がN群では肯定的一致傾向を強めたのに対しP, S両群では、むしろ葛藤をひきおこす一因となっている。N, P群とS群で有意差の生じたVI図では、N, P両群共不一致(UC)な評定傾向にあるに対し、S群では、中立的評定傾向が強い。これはS群がVI図の濃淡に対する感受性によるのか、あるいは意識的な回避反応を示したのか不明であるが、いずれにせよS群のVI図に対する感性受容の狭さを表示している。N, P両群のUC傾向は、濃淡のショックに帰因すると考えられる。同様にIX区図に於てもN-S, P-S間に有意差が生じたことは、色彩と共に、IX区図の複雑なゲスタルト特性が、P, N群に於ては、意識的

第1表 SD 評定による感性受容の一貫性に関する三群の比較 (分析 1)

		対 象			x ² 検 定					対 象			x ² 検 定		
		N	P	S	N-P	N-S	S-P			N	P	S	N-P	N-S	S-P
I ☒	NC	5人	3人	3人	}	ナ	シ	VI ☒	NC	4	3	3	}	×××××××	
	PC	0	0	0					PC	0	1	2			
	UC	15	11	13					UC	15	10	5			
	M	0	0	2					M	1	0	8			
II ☒	NC	2	1	3	}	ナ	シ	VII ☒	NC	0	0	0	}	×× ×× ナシ	
	PC	8	2	1					PC	15	6	5			
	UC	10	11	10					UC	5	8	10			
	M	6	0	0					M	0	0	4			
III ☒	NC	0	1	1	}	ナ	シ	VIII ☒	NC	1	1	1	}	ナ シ	
	PC	10	2	6					PC	7	5	6			
	UC	9	10	9					UC	11	8	6			
	M	1	1	3					M	1	0	6			
IV ☒	NC	3	1	4	}	ナ	シ	IX ☒	NC	0	2	0	}	×× ××	
	PC	1	0	0					PC	6	0	4			
	UC	14	13	11					UC	14	12	8			
	M	0	0	13					M	0	0	6			
V ☒	NC	6	4	6	}	××	X ☒	NC	1	0	0	}	ナ シ		
	PC	1	1	1				PC	11	6	4				
	UC	13	9	7				UC	8	8	9				
	M	0	0	5				M	0	0	4				

×…p<0.10 ××…p<0.05, ×××…p<0.01

PC: 肯定的評価の一貫 NC: 一貫した否定的評価 UC: 不一致中 M: 立的評価

葛藤を高め、S群に於ては、感受性の自由性を喪失せしめたものと考えられる。

三群間に有意差が生じなかった I, II, III, IV, V, VIII, IX, X 図の傾向を概観すると、I, IV 図は NC ないしは UC 傾向にあり、II, III, VIII, X 図は、PC ないしは UC 傾向にある。特に統計的な有意差を生ずるには到らなかったが、P群は全図版に関して UC 評定傾向にあり、N群は、II, III, VIII, X の色彩図版に対しては、PC, UC ほぼ同数で、III, X 図ではやゝ PC 傾向にあった。S群では、M評定傾向を示す者が、全図版を通じ17—33%を占め、S群の感情移入能力の弱化、感性評価に対する自我関与の稀薄さ及び情緒刺激からの遊離傾向を示している。表2で示される様に、VI から VII 図へのショックからの意識的回復性及び濃混に対するレディネスを検討すると N群では 86.8%が回復性やレディネスを獲得したに対し、P, S群では20%しか回復性を有していない。しかも一致傾向を示した者の中で S-60%, P-75%が逆に不一致傾向へ移行している点を考慮すると、明らかに濃淡ショックによる自我の情緒的混乱と意識的統制困難さを反映している。

次に、色彩刺激を検討すると VIII~X図が多色の色彩刺激にもかかわらず、最初のパステル・

第2表 意識的回復性の三群の比較 (分析 1)

色彩図版 (II, III, VIII~X) に対する回復性

	1)			2)		
	II→III⊕	II→III⊖	N-P	N-S	S-P	
N	20%	20%	⊕ ⊖ ⊕	⊖ ⊕	⊖ ⊕	N
P	20%	66%		×		P
S	22%	40%				S

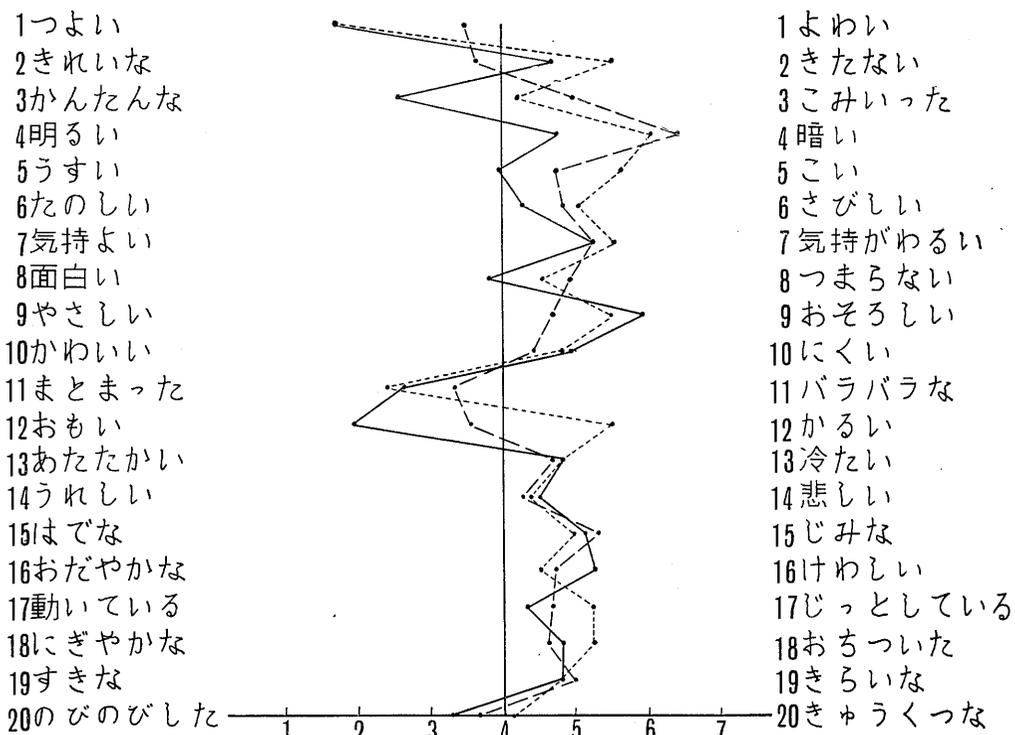
	3)		
	IX→X⊕	IX→X⊖	N-P
N	60%	30%	⊕ ⊖ ⊕
P	50%	0%	×× ×× ××
S	22%	70%	

1) II→III⊕はII図で一貫性を示さなかったもので中でIII図に一貫性を示した者の比率
 II→III⊖はII図で一貫性を示しながらIII図で不一致(UC)をきたした者の比率
 2), 3), 4) 以下同様である。

濃淡に対する回復性

	3)		
	VI→VII⊕	VI→VII⊖	N-P
N	86.8%	50%	⊕ ⊖ ⊕
P	20%	75%	×××
S	20%	60%	

第2図



分析 2

一例 IV 図

SD 評定項目別 に於ける各群のプロフィール

— N群
 - - - P群
 - · - S群

カラーに対してよりも二枚目 (X 図) で差を生じたこと、更に表 2 から VIII~X, IX~X への回復性を三群で比較すれば、P 群では IX 図で 66% 色彩ショックを与えたのが、X 図では 50% の回復性やレディネスを示した。他方 S 群では IX, X 図共に各々 100%, 70% の非回復性を示したこと、これからも、三群の明確な感受性受容度の差及び感情移入の豊かさの差を読みとることができる。しかも S 群に於ては、色彩、濃淡の両方に対して感受性の狭さと感情移入能力の毀損を示すが、P 群は色彩よりも濃淡刺激に対して、より意識的葛藤状況を深めることが判明した。これはおそらく濃淡刺激が色彩に比し、人格の基本的な情緒の安定性と統合性に結合していることから、意識面での情緒的刺激に対する感受性受容の広さや深さに強く影響を与えるものと考えられる。

2) 次に図版に対する評定項目間に、三群の相異や特徴が生ずるかを検討した結果が表 3, 4 である。(表中大文字 N は N 群, P は P 群, S は S 群を入れるが評定 1~3 の方向 (左側) の方向

第 3 表 SD 評定項目別に於ける各群の特徴 (分析 2)

		Total											Ntn	Per	Sts
		I 図	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X				
1	つよい — よわい	NPS	S		NPS				N				3	2	1
②	きれいな — きたない			NS				N					2	1	1
③	かんたんな — こみいった								nps	p	ns		2	2	2
④	明るい — 暗い				ps	p		S	S	S			0	2	4
5	うすい — こい		p	s	p			NS			p		1	3	2
⑥	たのしい — さびしい			PS				N					1	1	1
⑦	気持よい — わるい	n			pS		s						1	1	2
⑧	面白い — つまらない							PS					0	1	1
⑨	やさしい — おそろしい				P								0	1	0
⑩	かわいい — にくい	n		S				N					2	0	1
11	まとまった — バラバラな				P	pS							0	2	1
12	おもい — かるい	N						N					2	0	0
⑬	あたたかい — 冷たい	N						NPS	S				2	2	2
⑭	うれしい — 悲しい				S								0	0	1
⑮	はでな — じみな									p	NS		1	1	1
⑯	おだやかな — けわしい	n						N					2	0	0
⑰	動いている — じっとしている			NP			S				NS		2	1	2
18	にぎやかな — おちついた								S		NS		1	0	2
⑰	すきな — きらいな							NP		p			1	1	0
20	のび~した — きゅうくつな			N				NS					2	0	1

○印・第二次元・純粋に情緒的要因と感性的評価の次元

への指向に有意差を示したことを表わし、小文字は各群が5~7(右側)への指向の方向に有意差を示したことを表わす) 図版別及び三群間の特徴は、VII 図が N, P, S 三群に於いて10枚の内で肯定的な項目数が最も多い。VII 図のもつ「あたたかい」かんじは、三群共通したスケールである。N群はI 図に Nn 同数ずつを示し「にくい」「気持わるい」「けわしい」といった否定的感情移入と、「強い、重い」といった potency の次元での評価をしている点、I 図が N 群にとって男性的な強さの image からくる情緒的な面での圧迫感、威圧感を与えていること、VII 図がI 図と対照的に「たのしい」「かわいい」「おだやかな」「かるい」「すきな」といった肯定的評価と女性的 image を与えていることが判明した。

他方 P 群では IV 図が最も否定的感情移入傾向が強く、図版のもつ不気味さ、暗さに敏感に反応した意味づけがなされている。P 群は全般に、形態、濃淡、色彩の変化に非常に敏感で、SD 次元の第一次元、色彩や形態に対する論理的感性評価への偏りが他の二群より多く、特にIV 図では、第二次元でのより深い純粋に情緒的な次元での否定的感情評価が多くなっている。これは、IV 図が P 群に、他の図版とは異なった意味を賦与していると考えられる。いわゆる象徴仮説から導かれる父親的な権威的 image を受容することに対する自我の不安や葛藤を反映しているか否かは、詳細な分析にまたねばならぬが、P 群にとって VI 図のもつ意味は大きい。

S 群は、III, VI, X 図で肯定的評価が目立つ。S 群は心的水準の著しい低下に伴い意識面での葛藤が少なく、SD 評定は、表面的、知覚的水準か、さもなくば原始的未分化な情緒的評価のいずれかに偏向する傾向がみられる。これは感情の微妙なニュアンスに対する著しい感受性欠如を示す。特に柔かな色彩に対しては、未分化な原始的な情緒での評価がみられる。しかも同じ濃淡図版の IV, VI, VII 図に対して、共通した意味づけがなく、特に図では否定的感情移入が、IV 図では、明白な感情評価の不一致傾向が認められる。S 群では IV 図の対照として VI 図があげられる。

分析 3) 対外的統制機能と対内的統制機能の柔軟性の分析：結果は表 5, 6 に示す。第 5 表から N-P 群間に有意差を生じた図版は V 図以外すべてである。N-S 群間では I, V, VIII 図以外すべて有意差を生じた。明らかに N 群は他の二群をひき離し、対内的対外的統制機能の柔軟性を示している。P-S 群間に有意差が生じたのは、I, II, IX, X 図である。

II 図は、図版刺激の一部に初めて色彩を導入している点色彩障害による反応の遅延反応内容の質的低下、色彩(決定因)の不自然な使用から対外的統制機能の乱れが生ずる図版であるが両群を詳しく検討すると、P-S 両群共・色彩否定、回避等による主観的障害による現実吟味力と自我の集約力の低下をきたしている。特に S 群では color avoidance が50%を占めるのに対し P 群では color choosiness, と shyness が50%を占めるという色彩に対する操作の相違をみせている。

III 図は、II 図と同様赤色の色彩にもかかわらず両群共依然として主観的・客観的障害が N 群より多い。N 群では、II 図で色彩に対するレディネスを備えた結果、III 図では主観的障害がほとんど消失し、情緒的状况をより上手処理しうる能力を示しているが P-S 両群は、建設的な色

第4表 SD 評定項目別に於ける三群の比較 (分析2)

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
1 つよい — よわい			N-S P-S								N-P } N-S } は x^2 検 S-P } 定で各々 有意差が生じた ことを示す。
2 きれいな — きたない				N-S S-P	N-S		N-P				
3 かんたんな — こみ入った				N-P N-S							
4 明るい — 暗い				N-P N-S							
5 うすい — こい			N-S								
6 たのしい — さびしい			N-P N-S	N-P N-S	N-S						
7 気持よい — 気持わるい									N-P		
8 面白い — つまらない	S-P				N-S				N-P		
9 やさしい — おそろしい		S-P			N-P N-S				N-P S-P		
10 かわいい — にくい									N-P N-P		
11 まとまった — バラバラな											
12 おもい — かるい		N-P		N-P							
13 あたたかい — 冷たい				N-P N-S							
14 うれしい — 悲しい			P-S	N-S							
15 はでな — じみな				N-P N-S							
16 おだやかな — けわしい				N-P N-S					S-P		
17 動いている — じっとしてる					N-S						
18 にぎやかな — おちついた				N-P N-S							
19 すきな — きらいな		N-P		N-P N-S	N-P N-S				N-P S-P		
20 のびのびした — きゅうくつな					N-P N-S				S-P N-P		

彩の使用に失敗し、混乱した情緒衝撃から直ちに回復しえない統制機能の硬さを暗示している。P-S 両群による三枚の濃淡図版 (IV, VI, VII 図) の主観的障害は、その程度の差こそあれ、愛情欲求を受け入れることに対する意識的、無意識的な不安感、不満、緊張感を表明している。区図に関しては、分析1, 2の傾向と一致してN群では複雑なゲジタルトを障害を多少伴いつつも再構成できる自我の統制力回復力を有しているが、P群では、意識的な抑制による不当な防衛機制が作用し、葛藤、緊張が強い。S群では主観的障害とも客観的障害ともいえる現実吟味力の低下した無統制な防衛機能が顕著となることを示す。

第5表 対外的・対内的統制機能の柔軟性による三群の比較（分析3）

		対 象			x ² 検 定					対 象			x ² 検 定		
		N	P	S	N-P	N-S	S-P			N	P	S	N-P	N-S	S-P
I	+※	1人	1人	0人	}xxx	}xxx	}xxx	VI	+	6	10	17	}xx	}xxx	}xxx
	-※	0	11	0					-	14	4	1			
	±※	0	0	0					±	0	0	0			
II	+	5	9	14	}xxx	}xxx	}xxx	VII	+	0	3	8	}xxx	}xxx	}xxx
	-	14	2	2					-	20	5	7			
	±	1	3	2					±	0	3	3			
III	+	1	10	12	}xxx	}xxx	}xxx	VIII	+	5	4	9	}xx	}xx	}xxx
	-	19	2	3					-	15	10	4			
	±	0	3	3					±	0	0	5			
IV	+	2	8	7	}xxx	}xxx	}xxx	IX	+	0	5	3	}xxx	}xxx	}xxx
	-	17	4	3					-	20	7	11			
	±	1	2	6					±	0	2	4			
V	+	5	4	6	}xxx	}xxx	}xxx	X	+	1	5	1	}xxx	}xxx	}xxx
	-	1	11	6					-	19	6	13			
	±	1	2	0					±	0	3	4			

※ +は主観的障害が有り，-は主観的障害が無し，±は主観的とも客観的とも判断できるもの

第6表 形態水準の三群の比較（全反応の平均）（分析3）

	N	P	S	N-P	N-S	S-P		N	P	S	N-P	N-S	S-P
I 図	1.70	0.68	0.79	xxx	xxx		VI	1.11	0.50	0.29	xxx	xxx	x
II	1.31	0.87	0.60	xxx	xxx		VII	1.24	0.67	0.74	xxx	xxx	
III	1.23	0.63	0.72	xxx	xxx		VIII	0.94	0.66	0.58			
IV	1.29	0.86	0.38	xxx	xxx	x	IX	1.08	0.58	0.33	xx	xx	x
V	1.09	0.67	0.50	xxx	xxx		X	1.12	0.46	0.47	xxx	xxx	

x...p<0.10 xx...p<0.05 xxx...p<0.01

I 図に於いて，P 群が予想に反して主観的障害が少なくN群の方が多かったのは，分析2での図版に対する意味づけの相異を裏づけることになる。S群は外界の刺激に対する感情の鈍麻と，テストへの motivation の欠如等，自我関与の稀薄さと形態水準平均 1.0 以下ということからも知覚的水準での反応で満足していることが伺える。

分析 4) 主題活動の自由性，現実性の分析，結果は表7であるが，考察は分析5に含む。

分析 5) SD 法とロ，テストの対応関係から把握した人格の情緒的統合性と安定性の分析

結果は，8，9表及び第3図である。これら，三つの資料から一見して明らかな様に，N 群はP，S 両群をはるかにひき離れた情緒的統合性を有している。又一時的に一次過程に退行した自我が現実との接触を喪失することなく統制された創造的反応内容を生産することができる。情緒衝撃からの回復性や衝撃に対するレジリエンスも十分備えている。分析2で否定的感情移入の強か

第7表 主題活動の現実性の level の三群の比較 (分析4)

		対 象			x ² 検 定				対 象			x ² 検 定			
		N	P	S	N-P	N-S	S-P		N	P	S	N-P	N-S	S-P	
I	現 快	2 ^人	0 ^人	0 ^人				VI	9 ^人	4 ^人	0 ^人				
	中	9	12	2					2	3	4				
	不快	8	2	1		××	×××		3	5	8		×××	××	
	非現快	0	0	16					1	0	1				
	図 中	0	0	0					図	1	2	0			
	不快	0	0	1					2	0	3				
II	現 快	10	0	0				VII	15	3	4				
	中	8	5	2					2	6	9				
	不快	0	7	0	×××	×××	×		0	2	0	×××	×××		
	非現快	0	0	0					1	2	1				
	図 中	0	0	0					図	1	1	2			
	不快	0	1	0					0	0	0				
III	現 快	3	2	0				VIII	0	0	0				
	中	7	11	3					14	9	7				
	不快	7	0	1	××	××	××		4	3	8				
	非現快	0	1	3					1	1	1				
	図 中	0	0	5					図	0	0	0			
	不快	3	0	1					0	1	1				
IV	現 快	0	0	0				IX	1	0	0				
	中	8	7	7					11	7	12				
	不快	2	3	8		×			0	3	4				
	非現快	3	1	0					2	0	0				
	図 中	0	2	0					図	0	1	0			
	不快	5	3	3					3	3	2				
V	現 快	4	0	0				X	2	0	0				
	中	12	9	7					9	10	11				
	不快	1	2	4		×			0	1	6				
	非現快	2	0	0	×	×			3	0	0				
	図 中	0	0	2					図	0	1	0			
	不快	4	2	5					3	2	1				

高木：情緒的統合性と自我障害の関係

第8表 情緒的安定性と情緒の統合性に於ける三群の比較（分析5）

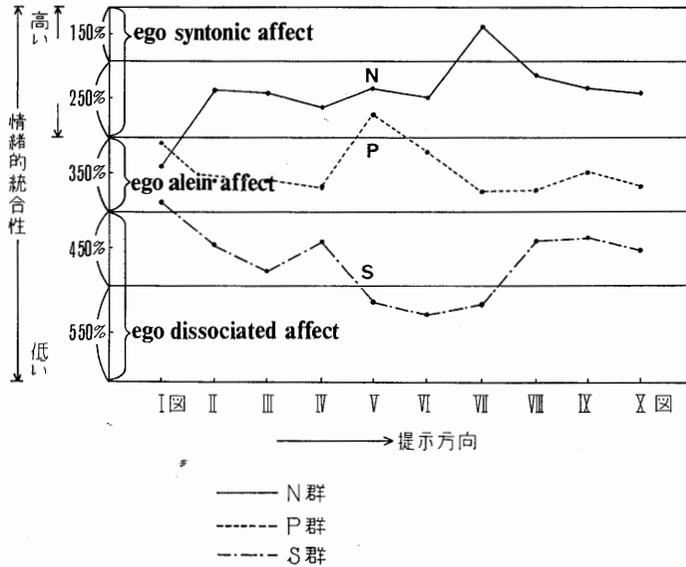
	wlight	対 象			x ² 検 定				対 象			x ² 検 定		
		N	P	S	N-P	N-S	S-P		N	P	S	N-P	N-S	S-P
I	1	2 [^]	1 [^]	0 [^]				VI	11 [^]	2 [^]	2 [^]			
	2	7	12	15					10	2	3			
	3	9	1	1	×××	×××			7	10	5		××	××
	☒ 4	0	0	0					☒ 0	0	0			
	5	1	0	0					1	0	7			
II	1	8	0	1				VII	13	1	3			
	2	7	0	1					6	3	3			
	3	5	12	8	×××	×××			0	6	1	×××	×××	××
	☒ 4	0	2	2					☒ 0	0	1			
	5	0	0	3					0	1	8			
III	1	7	0	1				VIII	4	0	1			
	2	2	1	2					5	4	2			
	3	5	9	5	×××	×××			9	6	6	×××	×××	
	☒ 4	0	1	1					☒ 0	1	2			
	5	4	1	8					1	0	4			
IV	1	0	2	1				IX	2	0	0			
	2	10	4	2					10	2	2			
	3	2	8	4	×××	×××			6	10	5	×××	×××	
	☒ 4	1	0	2					☒ 0	1	2			
	5	0	0	4					1	0	4			
V	1	1	2	1				X	3	0	0			
	2	10	2	3					9	3	4			
	3	7	10	5		×××	××		6	6	4	×××	×××	
	☒ 4	0	0	0					☒ 0	1	2			
	5	1	0	7					1	3	5			

×...p<0.10 ××...p<0.05 ×××...p<0.01

第9表 全図版に対する情緒的安定性と統合性の三群の比較（分析5）

wlight	N	P	S	N-P	N-S	S-P
1	22%	5%	5.8%			
2	41.5	27.7	20.0			
3	30.5	52.0	23.8	××	××	××
4	0.6	28.0	7.7			
5	4.5	6.4	31.0			

第3図 情緒的安定性を情緒の統合性の三群による比較



ったI図に対しても否定的な感情を受容できるだけの自我の強さや統合性を有している。

P群とは、V、VI図で有意差を生じなかった。V図ではP群は、N群に近い統合性を有しているがVI図ではP群の方が対内的な情緒統制や統合を目指して葛藤を克服する為の心的エネルギー消費が多い。しかもP群ではIV図の濃淡障害による情緒の混乱、あるいは情緒統制困難な状態からV図で一時的回復し、VI図に於いてはそのレジネスでもって創造的・生産的な所産は期待できずともS群の様に極端な低下をみることなく、二次過程で衝動を処理しようと努力している。S群では全く逆方向を辿りIV図での衝撃が、V、VI図にまで影響を与え、特にIV図では、自我が未分化なlevelに退行し、現実吟味力の低下、主題活動の自由性の喪失・観念連合の混乱や情緒と分離したimageの出現、社会的な枠組からの逸脱を失す性的内容の出現(80%)が顕著となりVI図で潜在的にくすぶっていた一次過程での衝動がVI図で顕現化されたという印象を受ける。上述の三枚に加えてP-S群で有意差の生じたのは、III、VII図である。P群が常に自我隔絶的な情緒状態の下で葛藤や緊張と対決しているのに対してS群が一時的あるにせよN群に近い情緒的統合性を有する場合と、逆に自我から分離した分裂病特有の自閉的傾向を示す場合と両者の振幅が、対人関係での共感性を必要とする際(III図)や愛情欲求や依存関係での際に極端に変容すると解される。詳しい分析は別の機会にゆずり要約すると、

1) 診断的には、P-S群の鑑別にはIV-V-VI図への継列分析による濃淡障害の程度と反応内容及びSD評定との対応傾向を観察することが、診断の一つのメルクマールとなる。

2) 更にIII、VII図に於ける人間知覚に対する反応内容の現実性のlevelを検討し比較すること。VII図ではS群は自我同調的情緒と自我から分離した情緒の両極に分れ、III図では自我同調的情緒が極めて少ない。

- 3) P 群は全般に自我隔絶の情緒が特徴となり、N 群は自我同調の情緒が特徴的。
- 4) N 群は I 図が否定的、VII 図が肯定的感情移入の最も強い図版であるに対し、P 群は IV 図と VII 図、S 群では一応 VI 図と VII 図と結論づけられ、否定的感情移入による意味づけが三群で異なることが想定されるが、これは象徴仮説と併せ今後の問題点となる。
- 5) IX 図はそのゲンタルト特性から P 群 S 群に對外的統制機能の混乱を生ぜさせるか S 群は IX 図から X 図へ自我の集約力の低い段階で反応し表面的な防衛に成功するのに対し P 群では X 図の方が IX 図よりより統制困難な混乱状況をきたす。

付記：本論文作成に当り御指導頂いた倉石教授、梅本助教授、河合講師、齋藤講師、及び精神科藤縄助教授に厚く御礼申し上げます。